

Title	マルクスの欲望論 - 初期の著作の検討を中心として -
Author(s)	神谷, 明
Citation	経済論叢 (1979), 124(1-2): 46-67
Issue Date	1979-07
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/133783">http://dx.doi.org/10.14989/133783</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第124卷 第1・2号

---

フランスの貴族商業論のひとつま(下)……………	木崎喜代治	1
Currency Board System 生成の論理, 1893-1917年(下)……………	本山美彦	25
マルクスの欲望論……………	神谷明	46
「科学的管理」批判と効率・人格・民主主義……………	陶山計介	68
資金問題と利潤率決定……………	山下清	87

經濟学会記事

---

昭和54年7・8月

京都大學經濟學會

# マルクスの欲望論

——初期の著作の検討を中心として——

神 谷 明

## I は じ め に

経済学におけるマルクスの欲望論についての従来の議論は主に貧困化論争、とりわけ労働力の価値と欲望との関係を理論的に考察することに集中されていた<sup>1)</sup>。それらは主として労働力の価値をめぐる議論のなかでかざられた範囲でのとりあつかいであったといえよう。この結果、研究の中心点は社会的な欲望の水準が労働力の価値を上昇させるかどうか、賃金は価値をカバーしているかどうかという点にむかうことにならざるをえない。もちろん欲望の問題を労働力の価値とかかわらせて考察することは重要な課題であるが、もうすこし視野をひろげてみるとマルクスの欲望論の射程はもっと広いもので、資本主義社会における欲望の発展は一方ではさまざまな欲望をもった人間を労働力として日日再生産し、他方では資本と賃労働との関係を揚棄する欲望すらうみだすと考えていたように思われる。そうした含意をもって労働力の価値と欲望の価値関係の理論的展開が成立しているのであるから、欲望論研究の射程はたとえば下山氏の次のような指摘にとどまっているわけにはいかないのである。「人間そのものではなく、人間が商品の価値関係としてあらわれてくるところを研究対象とする経済学では、人間の心理や生理そのものを研究対象とすることはない。

1) 村串仁三郎氏は従来の経済学における欲望についての議論を、①賃金論争、②価値以下説、③価値形態論、④社会的必要労働論の四点にまとめられている。村串仁三郎、マルクス欲望論の問題点と研究視角(上)(下)、「経済志林」40巻-4号、41巻-1号、1972年、(上)151頁。労働力の価値と欲望の問題については拙稿参照。労働力の価値と欲望問題、「経済論叢」、121巻3号、1978年3月。

ところが、現実世界では、価値関係の展開の中に、歪曲された形であれなんであれすべての人間の問題が反映されているとはいえない。」<sup>2)</sup>

村串仁三郎氏は従来の欲望論に関する議論の対立は、マルクス経済理論を理解する上で欲望の意義を重視しようとする立場と無視ないし否定する立場の対立であったと指摘する。その根底には欲望を価値関係においてどう理解するかという課題が存在している。いずれの立場にせよこれまでの議論は欲望概念の把握をマルクスの研究史を十分にふまえた上で価値関係に位置づけて論ずるという視点が弱かったのではないだろうか。マルクス欲望論は必ずしも、労働力の価値と量的に還元化されてしまった欲望との関係だけを論じてこと足るものではないのである。だから当然マルクス欲望論の全面的検討の必要性が提起されなければならない。といってもそれらの研究がまったく皆無ではなかった。たとえば杉原四郎氏は経済本質論としての欲望論に注目され、「労働の体系」と「欲求の体系」の相関的發展を恐慌論の観点から、考察された<sup>3)</sup>。また村串氏も欲望論の全面的検討の研究課題と視角を提起されている<sup>4)</sup>。

最近の外国の研究では、哲学的アプローチではあるがアグネス・ヘラーの労作がある<sup>5)</sup>。「マルクスの思想における欲望概念の意義と機能」という原タイトルの著書はマルクスの欲望論を疎外された欲望からラジカルな欲望への発展としてとらえ、変革の動機・意識形成の理論的構築を企図したものである。「マルクスの転変たえまない欲望論解釈から主要な傾向を解明し、マルクスが純粋に物質的なものを超える欲望の体系の再建に付与した重要性を提示した。」<sup>6)</sup> また未来社会の欲望についても「マルクスが予測し、今日我々にとっても真にさしせまった事柄である問題、『結合生産者の社会』を示す諸観点、と

2) 下山房雄、労働市場と賃金、金子ハルオ編『講座現代賃金論第1巻』1968年、114頁注(6)。

3) 杉原氏は次のように述べている。「マルクスが世界市場恐慌の必然性を論証しようとするのは、こうした観点、すなわち資本主義における『労働の体系』と『欲求の体系』との相関的發展の中にひそむ基本的矛盾に根ざすという観点である。」杉原四郎、『経済原論1』、1973年、77-8頁。

4) 村串仁三郎、前掲論文。

5) Agnes Heller, *The Theory of Need in Marx*, 1976.

6) *Id.*, jacket.

りわけ『ラジカルな欲望』という考えを明らかにした。<sup>7)</sup>

筆者の知るところではこの著作はマルクスの主要著作を検討し、マルクス欲望論の総体的把握を試みた最初のものとして評価しうる。しかしその構成は欲望概念の哲学的考察が中心であり、経済学（労働価値論）との関連における展開は不十分である。疎外された欲望を出発点としつつ、物質的欲望から変革欲望（ラジカルな欲望）へと発展していくマルクスの欲望論が何に依拠しつつ展開されていくのかは今後の検討課題である。我々は、この課題をはたすために疎外論、史的唯物論、価値論（経済学）へのマルクスの理論的構成部分の発展を考察してみたいと思う。

ともあれ、小論は以上の研究成果を踏まえた上で、マルクス欲望論の基本テーマがなんであったのかを検討してみたい。ここではその課題をマルクスの初期の著作に限って考察する。我々はそのあら筋がすでに初期の著作に提出されているものと考え、中期以後のマルクス欲望論は次の課題とする。

ところで初期のマルクスにおける欲望論はマルクス主義の理論的構成部分の形成発展の中で述べられており、それ自体として体系が存在するわけではないので、叙述は断片的な欲望についての言及の再構成という形をとらざるをえない。小論ではその順序を、『経哲草稿』、『ドイツ・イデオロギー』、『哲学の貧困』、『賃労働と資本』を中心にして検討する。その場合の展開の論点として次の3点を上げておこう。(1)欲望概念の具体化。欲望の構造の解明。(2)発達的欲望、もしくは変革の欲望がどのように位置づけられているか。(3)価値関係と欲望の問題。これらの論点を基準にしてマルクスの欲望論がどのように発展していくのかを描きだすことが小論の課題である。

7) *Id.*, jacket. なお「変革の欲望」についてはゴルツがすでに労働運動との関連で位置づけて論じているが、両者の理論的關係は定かでない。André Gorz, *Stratégie Ouvrière et Neo-capitalisme*, 1964. 我国でのゴルツの紹介は次の論文を参照。宮崎厚一、アンドレ・ゴルツ——変革欲求の組織化、「思想」、1967年7月。

## II 疎外された欲望

——『経済学哲学草稿』を中心として——

労働者を始めから「動物的存在」や「機械になりさがった存在」として捉え、その「悲惨な状況」を資本と賃労働の関係の条件として考える国民経済学の「労働と欲望の体系」に対して、マルクスは類的存在としての労働者の視点で、人間の本質から疎外された状況として同じ国民経済学的現実、「欲望の体系」をみすえ批判する。その基本的概念としていわゆる「疎外された労働」の規定がある。

(1)労働者に対して力をもつ疎遠な対象としての労働生産物からの疎外。(事物の疎外)(2)労働そのものの疎外的関係、ある欲望の満足ではなく、労働以外のところで諸欲望を満足させるための手段にすぎない強制労働としての労働の性質。(労働の自己疎外)(3)以上の規定から導かれる類的生活からの疎外。(4)人間からの人間の疎外<sup>8)</sup>。

さて問題は疎外された労働が欲望をどのように規定するかである。その規定はまず第一に労働と欲望との関係の転倒、手段と目的との転倒であり、第二に、欲望一般の貨幣もしくは私的所有への還元、第三に、労働者の欲望の貧困化である。それらを順次みていこう<sup>9)</sup>。

労働と欲望の転倒性は疎外された労働の第二規定からただちにでてくる。いわば商品生産と資本主義生産に固有の側面である。第二についてはまず疎外された労働と私有財産との関係を明らかにしなければならない。

「労働者は疎外された労働を通じて、労働にどって疎遠な、そして労働の外に立つ人間の、この労働に対する関係を生みだす。労働に対する労働者の関

8) K. Marx, "Ökonomisch-Philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844", *Werke*, Ergänzungsband erster Teil, Dietz Verlag, Berlin, 1968, (以下 MEW. と略す), SS. 516-517, 城塚登、田中吉六訳「経済学哲学草稿」, 1964年, 93-8頁。

9) ヘラーは疎外された欲望を四つの側面から検討している。(1)手段と目的の転倒, (2)質と量, (3)貧困化, (4)利害, Heller, *op. cit.*, pp. 47-73.

係は、労働に対する資本家の関係を生みだすのである。……したがって私有財産は外化された労働の……成果であり必然的帰結なのである。」<sup>10)</sup>

私有財産は疎外された労働の帰結であり、逆に、私有財産は再び労働を外化する方法となる。こうした私有財産のもとでは、欲望の創出やその手段の発展が他人を犠牲にし、隷属させる手段と生産にはかならず、貨幣は国民経済の真の欲望となり、ますますそれに対する量的還元化がすすむ、だから貨幣をもとめることが主体的に現われると次のようになる。

「生産物や欲求の拡大が非人間的ですれからしの、そして不自然で妄想的な欲望の奴隷、ぬけめがなくてつねに打算的な奴隷になるというかたちで現われる——私有財産は粗野な欲求を人間的な欲求にすることを知らない。」<sup>11)</sup>

そして他方では、資本家にあっては、諸々の欲望の洗練化を生みだすが同時に、労働者には、欲望の野蛮化、粗野な、抽象的な単純化を生みだす。(欲望の貧困化の進行)

「戸外の空気を、という欲求でさえも、労働者の場合は欲求であることをやめ、……光、空気等々のもっとも単純な動物的清潔ささえも、人間にとって欲望の一つであることをやめる。」<sup>12)</sup>

このような人間としての欲望の喪失は、何によってもたらされるかに答えてマルクスは言う。欲望とそれらの手段の増加そのものが欲望の喪失と欲望充足手段の剝奪をもたらすのであると。国民経済学者の証明を借りれば、(1)労働者の欲望を肉体的生存のぎりぎりまで、必要で最低の維持にまで制限し、しかも労働者の活動をもっとも簡単な機械運動にまで還元することによって、又(2)ぎりぎりの生活水準を一般的標準とすることによって、労働者を無感覚で欲望のもたない存在にしまうのである<sup>13)</sup>。その意味で、労賃はまさに労働者の欲望喪失と手段の剝奪の結果であり、その量的表現として理解されている。

10) Marx, *a. a. O.*, SS. 519-20, 前掲訳書101-2頁。

11) *Id.*, S. 547, 同上, 150頁。

12) *Id.*, S. 548, 同上, 151頁。

13) *Id.*, S. 549, 同上, 152-3頁。

ここでのマルクスは国民経済学の立場からではなく、まさに人間的存在としての労働者の立場から欲望を語っている。だから国民経済学は「その世俗的な快樂的な外観にかかわらず——真に道德的な科学であり、自制、つまり生活とすべての人間的欲求との断念がその主要な教義である」<sup>14)</sup>というようにその欲望論の核心をつくことができたのである。その場合の労働者の欲望の内容と水準は生理的・自然的欲望に限定されており、その批判の重心は欲望そのものの人間の本質の疎外に置かれていた。つまりこの段階では資本主義的諸関係のもとにおける労働者の欲望は、生産力の発展につれての人間的欲望そのものの喪失として語られている。そして人間性を喪失した欲望の内容と水準が、賃労働制における労働者の欲望として規定される側面の分析は国民経済学の証明としてのみ語られているにすぎない。すなわち、欲望の貨幣もしくは所有への還元化が価値関係への包摂であることに気付いてはいたマルクスではあるが、価値関係への包摂は批判すべき対象であっても、それを現実の基礎としていかに展開していくかは未だ残された課題であったのである<sup>15)</sup>。

ところでこうした疎外された労働と人間本質と欲望との相互関係の捉え方については当然次のような指摘が生じうる。

疎外的関係を止揚して、対立する生産物・諸制度を人間の手に取戻さなければならない、と叫ぶとき、「ここでは本来あるべき人間の姿が暗黙のうちに前提されていた。……本来あるべき人間の姿というものを、一体マルクスはどのようなものとして理解していたか、となると、『手稿』の時点では、まだあらゆる『疎外』から自由な人間、という消極的な規定以外には、ほとんど積極的呈示を見出し得ない。」<sup>16)</sup> もちろんマルクスは「すでに資本制社会の歴史性を知っており、それが封建社会の解体のなかから生まれ、やがて社会主義社会へと

14) *Id.*, S. 549, 同上, 154頁。

15) ヘラーは疎外された欲望の一側面としての量的還元化を非常に強調しているが、価値論との関係の考察が十分でない。Heller, *op. cit.*, pp. 47-73.

16) 山之内裕, カール・マルクスの社会科学体系における疎外論の地位, 内田義彦, 小林昇編「資本主義の思想構造」, 1968年, 179頁。



移行することを見透した」のではあるが「人間本質の存在それ自体がまた一定の歴史的規定性を受けずにはいないこと、この点にはなお十分に考え及んでいなかったといつてよい。」<sup>17)</sup>

その場合のどういう人間本質かという問題は、この段階のマルクスにとってどういう欲望をもった人間本質かということである。すなわち「疎外」から自由な人間——あるべき人間が現実の人間を基礎として語られるためには、現実の人間が自己の人間本質を取戻す契機と、その過程が語らねばならない、その契機となる欲望が解明されなければならないであろう。この点についてはどうか。

それを欲望の疎外的性格と私的所有の廃止された社会での欲望の比較の問題で考察してみよう。

欲望と労働との本質的關係という視点から私的所有——資本主義における欲望の状況をみるという点ではローゼンベルグも次のようにマルクスを理解している。

マルクスは欲望を私的所有の枠内ではどうか、社会主義ではどうかという問題をたてている。すなわち欲望が社会関係によって規定され、社会主義のもとでは欲望はすばらしく増大し、人間の活動を展開させる刺激となり、真に社会的人間となるが、ブルジョア社会では人間を非人間化した私的所有が彼の欲望をもどのように非人間化し、どのようなものに結びつくかを示す。しかもそのような非人間化された欲望も、有産階級の致富手段となる。結論として「一般に、私的所有のもとでは、新しい欲望を人為的に燃え立たせることは、一部の人が他の人を犠牲にして富を積む手段となる、とマルクスは示している。」<sup>18)</sup>

本質的な欲望とは何かをマルクスがどう考えていたのかはそれほど具体的ではない、むしろ抽象的に「あらゆる感覚を十分そなえた人間」、「全体的人間」<sup>19)</sup>

17) 同上、179頁。

18) Д. И. Розенберг, *Очерки развития экономического учения Маркса и Энгельса в сороковые годы XIX века*, Москва, 1954年, 副島種典訳「初期マルクス経済学の形成(上)」, 1957年, 215頁。

19) Marx, a. a. O., S. 542, 前掲訳書, 140頁。

に対する欲望として表現されているにとどまる。

「生成しつつある社会が私有財産とその富および貧困との……運動を通じて、この〔人間的感覚の〕形成のためのすべての素材を見いだすように、生成しおわった社会は、人間の本質のこうした富全体における人間を、すなわちゆたかな、そしてあらゆる感覚を十分にそなえた人間を、その社会の変ることのない現実として生産する。」<sup>20)</sup>そして「すべての歴史は、『人間』が感性的意識の対象となり、そして『人間としての人間』の欲求が〔普通の〕欲求となるための準備の歴史である。」<sup>21)</sup>

だからマルクスにあっては、疎外された欲望は出発点であり、共産主義における欲望、「人間としての人間の欲望」が到達点であった。歴史はその準備の歴史であった。とすれば資本主義的欲望——疎外された欲望については禁欲的にならざるをえないのであろうか。資本主義的欲望を否定（禁欲）し、社会主義的欲望を対置する方法がマルクスのものであるかという問題は当然生じうる。たとえば次のような見解がでてくる。

「青年マルクスはプラトンと同様、市民社会の核心を富への欲望と自由に見ていた。彼によると実地的な欲望と利己主義が市民社会の原理であり、市民社会の基礎はモナドとしての人間の自由と、自由の人権の実際上の適用としての私有財産である（ユダヤ人問題によせて）。私有財産制は、人間の基本的欲望と密接に結びついて展開されてきたのであるから、その止揚には厳しい克己と禁欲が条件となるのを忘れてはならない。このようにプラトン同様に禁欲的・共同的な方向で人間の理想的な有り方を考えようとしていた。」<sup>22)</sup>

このような理解はマルクスの含意を十分くんでいるとはいえない。むしろマルクスのこの段階における欲望発展の論理の不十分さにひきずられた見解だといえよう。つまり疎外された欲望がいかにゆたかな人間的欲望になるのかの過程が描かれていないことがかかる欲望の否定的強調に一面的に導かれていくの

20) *Id.*, S. 542, 同上, 140-1頁。

21) *Id.*, S. 544, 同上, 143頁。

22) 戸田省二郎, 欲望と禁欲, 「理想」, No. 544, 1978年9月, 124頁。

であろう。しかしながら、それではマルクスの欲望論の意義は過少に評価されてしまう。なぜなら、変革の主体としてのプロレタリアートが発見され、その変革の意識の主契機として欲望は位置付けられているからである。つまり否定されるべき欲望がいかにして変革の欲望となるのかの筋道の発見は疎外された欲望の積極的意義を見出すことなしには不可能であろう。

「疎外の止揚は、支配的な力をもっている疎外の形態からつねに生起する。すなわちドイツでは自己意識から、フランスでは政治がそうであるから平等から、イギリスでは現実的な、物質的な、ただ自分自身によってだけ自分を測定する实际的な欲求から生起するのである。」<sup>23)</sup>

实际的な欲求の疎外形態から、いかに止揚の契機を引きだすのかは、まずもって現実の欲望の生産からいかに社会が歴史が發展していくかの問題意識をもたねばならない。そのうえで、労働者の欲望の抽象的欲望(生理的・自然的欲望)への限定を価値関係としてとらえる国民経済学的事実から出発しながらも、欲望の發展を具体的に構造的にみとどける必要がある。それは次節で考察される。

とはいえ、疎外され、奪われたものは最終的には我がもとに取戻されるものとして論じられているのであるから、取戻す衝動は欲望となる。それは他の諸諸の欲望をも提起する起動力となるだろう。というのは欲望は孤立して存在するものではなくそれぞれの社会に特有な欲望の総体——欲望の体系として存在しうるからである<sup>24)</sup>。契機となりうる欲望が何んであるかは実践的にのみ解決されるだろう。そしてまた、人間の本質へと向かう欲望はそれを奪われたものだけが抱きうるのであって、その主体の解放は「社会の私的所有等々からの奴隷状態からの解放は、労働者解放」として現われる。それゆえ、労働者の欲望は禁欲(疎外された欲望)ではなく、欲望の解放へと向うものであろう。労働者の人間本性の獲得——全体性、共同性への欲望<sup>25)</sup>は資本との関係をつうじて、

23) Marx, *a. a. O.*, S. 553, 前掲訳書, 160-1頁。

24) Heller, *op. cit.*, p. 96, 参照。

25) マルクスは他の人間を求める欲望, 団結への欲望として共同性への欲望を語っている。Marx, *a. a. O.*, S. 538, 前掲訳書, 134頁。

はじめて現実的に生産される。資本は他者に対する支配、労働者の全体性の剥奪を通じて自己の「全体性」を得る。資本家の「洗練された欲望」は貨幣に対する欲望、利潤欲に還元される。それ故労働者だけが真に人間の全体性、普遍的欲望を発展させていく主体的担い手となりうるものであり、資本との関係で奪われた欲望を取戻そうとする衝動がその出発点となるだろう。『経哲草稿』の欲望論のもつ意義をまずはこの点においておさえなければならない。

### III 史的唯物論における欲望

——『ドイツ・イデオロギー』から——

我々は人間の本質からの疎外という『経哲草稿』の議論から、疎外の歴史的諸形態の議論へとすすまねばならない。すなわち、「人間的」欲望からではなく日々歴史によって生産される、生活の基礎となるべき欲望から出発しなければならない。それはまず「現実にあるがままの、すなわち活動し物質的に生産しているままの個人、したがって一定の物質的な、そしてかれらの恣意から独立な制限、前提および条件のもとで活動している個人」<sup>26)</sup>が問題となる。そしてその諸個人が何であるかは、かれらの物質的条件にかかわっている。そうした諸個人からなる社会の歴史認識において欲望はどのように位置付けられるかをみてみよう。

衣食住等の欲望を充足する手段の産出、「すなわち物質的生活そのものの生産」が「あらゆる歴史の根本条件」であり、それを人間にとって当然の地位として認めることが「あらゆる歴史的理解」にさいして第一の点である。第二の点は、「満足された最初の欲望そのもの、満足させる行動、および満足のためにすでに手に入れた道具があたらしい欲望へみちびくこ。」第三の関係としては、「自分自身の生活を日々あらたにつくる人間が他の人間をつくりはじめること、すなわち……家族である。」<sup>27)</sup>「ところで生活の生産は、労働における

26) K. Marx, F. Engels, "Die Deutsche Ideologie", MEW, Band 3, 1958, S. 25, 古在由重訳「ドイツ・イデオロギー」, 31頁。

27) *Id.*, SS. 28-9, 同上, 34-6頁。

自己の生活の生産も生殖における他人の生活の生産も、そのまますぐ二重の関係として——一方では自然的な、他方では社会的な関係として——あらわれる。」こうした関係は一定の生産様式と結びつき、生産諸力の発展は社会状態を制約しているので人々の結びつきは「欲望と生産の様式によって制約されている。」<sup>28)</sup>

こうして根源的な歴史的諸関係の四つの契機を考察した我々ははじめて「人間が『意識』をもっていることをみいだす。」<sup>29)</sup>だからこの意識ははじめから社会的な産物であり、「生産性の上昇、欲望の増加、およびこの両者の根底によこたわる人口増加によってなお一層の発展をとげてゆく。」<sup>30)</sup>

そこで我々はまず生産と欲望と意識との関係を検討してみよう。生産と欲望との関係については杉原四郎氏は次のようにマルクスの叙述を注目している。

「第一に、マルクスの歴史観において、生産の視点と欲求の視点とが相ならんでとりあげられていること、……第二に、人間の生活の社会的生産には物質的生産の他に家族生活を通じての生殖作用という側面をもつことが含意されており、「労働を社会的に意義づけ方向づけるものとしての人間の欲求を基本的に規定しているのは、いかなる時代でもこの家族生活にほかならないであろう。」そして両者を含めてマルクスはその歴史観の特質、「すなわち生産から出発しながらしかもその生産を人間生活全体との関連で、とりわけこれを欲求と相関的にとりあげようとする特質」を表明しているという理解である<sup>31)</sup>。

人間の生活において第一義的意義をもつ欲望とその生産が社会関係の出発点であり、歴史はその欲望の生産の様式の発展であることが確認される。ところがその欲望がどのようなレベルの欲望であるか、つまり欲望の構造そのものはまだ明確になっていない。それが欲望と意識との関係において異なる理解をうみだしている。たとえば、藤野氏の *Bedürfnis* を意識から独立した必要とい

28) *Id.*, S. 30, 同上, 37頁。

29) *Id.*, S. 30, 同上, 37頁。

30) *Id.*, S. 31, 同上, 39頁。

31) 杉原四郎, 前掲書, 73-4頁。

う概念でとらえる見解がある。藤野氏は、「人間が生きるために必要なものは、意識されようとされまいと客観的に実在している欠乏、不足であり、これを充たそうと求めるのも、意識されようとされまいと客観的に実在している人間の要求であって、このような客観的実在としての必要（不足、欠乏）と要求を、Bedürfnis, need, besoin などという言葉はあらわしている。その主観的に意識されたものが欲望であって、Begehr, Begier, Begierde とか desire とか désir がこれである。それゆえ従来、マルクス主義の古典で『欲望』と邦訳されている Bedürfnis は『必要』とか『要求』とか訳すほうがよい」<sup>32)</sup>と提案された。その際に先程のマルクスの引用の考察順序（意識が欲望の後にでてくること）に注目されて論じられたのであるが、村串氏はまずこの点から藤野氏の「意識から独立した Bedürfnis（必要・要求）」論を批判する。その要点は次のようなものである。マルクスは生産や欲望が意識から独立しているということを主張したのではなく、人間の現実的生活についての認識的意識が、即自的な人間の現実的生活の根本的側面の分析の後の問題になると主張しているにすぎない。自覚的に意識されない欲望も実在しうが、だからといって欲望は意識から独立した客観的実在であるとはいえない<sup>33)</sup>。そして「藤野氏の意識から独立した欲望論は、わたくしがこれまで研究してきたマルクス欲望論のどこにも存在しなかったと確信をもって指摘」<sup>34)</sup>される。村串氏の欲望の概念規定はこうである。「欲望とは、人間の物質、精神的実践を推進する人間の特殊な実践的意識＝意志である」。<sup>35)</sup>

筆者自身は Bedürfnis や Begierde の訳語をほぼ欲望（ごく特別な時には欲求）として用いており、他の論者も大同小異であろう<sup>36)</sup>。しかし問題は訳語

32) 藤野渉, 「史的唯物論と倫理学」, 1972年, 24-5頁。

33) 村串仁三郎, 前掲論文(下), 108-9頁。

34) 同上, 112頁。

35) 同上, 120頁。

36) 芝田進午氏はヘーゲルの規定として次のように紹介している。「(一)自然哲学の対象とする生物における欲求に、Bedürfnis、(二)労働とともに形成されかつ自己意識の第一段階をなす欲望に Begierde、(三)市民社会における欲望にふたたび Bedürfnis」, 芝田進午, 「人間性と人格の理論」, 1961年, 54頁注四。馬場修一氏は、生理学的には欲望、社会を通したものは欲求、欲求、

ではないことは明らかである。

藤野氏の主張は欲望を人間の存在条件のそれぞれのレベルで分類しようという点では、つまりこの場合では客観的存在としての必要のレベルでの欲望を強調するという限りでは賛成しうるし、それは後で述べるように欲望論の発展にとっても重要な主張であろう<sup>37)</sup>。しかしその区別が、客観的存在としての要求とその主観への反映としての欲望という区別をマルクスの *Bedürfnis* と *Begierde* でなされているという主張には賛成できない。この点は藤野氏自身も認められているように<sup>38)</sup>、マルクス自身、この段階でそうした区別の下に *Bedürfnis* と *Begierde* を使い分けて欲望論を展開しているとは思えない。『ドイツ・イデオロギー』の第一規定の欲望とそれから生まれる第二規定の欲望との構造的関係は定かではないが、ここでは『経哲草稿』の疎外された欲望と人間的欲望という規定よりも一歩前進したものを受取っており、後の必然的の欲望概念への発展の萌芽がみられる。

そこで次に、このように基本的位置付けを与えられた欲望が生産力の発展につれて、どのように発展し、労働者の発達の欲望へと展開していくか、そしてその条件は何であるかを考えてみよう。そのためにはまず生産力発展の推進力としての分業を取上げねばならない。分業こそが個々の人間を超えうる生産力を生みだし歴史を推進してきた主要な契機にはほかならないのであるが、それは社会の意識的統制を受けたものではなく「自然成長的」発展をとげて元来無政府である。このような分業にもとづく生産力は諸個人から独立したものとして人間に対立している。「そしてこれについてかれらは、どこからきてどこへゆくのかを知らない。したがって、もはやかれらはこれを支配することができない。」<sup>39)</sup>だからそうした分業の支配の下では、労働者の人格の発展は一面的な

＼が對他、対社会に向けられた時は要求となるとしている。馬場修一、IV文化、島田豊綱「講座史的唯物論と現代1」所収、1977年、182頁。

37) 真木悠介氏は欲望をさまざまな層位や位相をはらむ動的な構造の総体として把握すべきだとし、必要、要求、欲望の層位で区分して論じている。真木悠介、「人間解放の理論のために」1971年、107-10頁。

38) 藤野渉、前掲書、25頁注4。

発展しかとげられず、その生活諸条件は資本との関係において一種の偶然性に支配されている。それゆえ、市民社会の個人としての発達に対する欲望と生活諸条件の偶然性との対立と矛盾は鋭くなる<sup>40)</sup>。

分業の廃棄こそが生産力の発展を、歴史の展開を諸個人が制御する鍵となるとマルクスは言う。

「一般的な階級関係のもとへのかれらの人格的な諸関係の包摂などを廃棄することは、結局のところ分業の廃棄を条件としている。」ところがその「分業の廃棄は交通と生産力との発展を条件としているのであってそれらのものによって私有と分業とが桎梏となるような普遍性にまでその発展が達していなければならない。さらにわれわれがしめしたように、私有はただ個人たちの全面的な発展を条件としてのみ廃棄されることができる。というのは、まさに現存の交通および現存の生産力は全面的であって、ただ全面的に発展する個人によってのみ身につけられることができるからである。」<sup>41)</sup>

分業の廃棄、私的所有の廃棄の条件として全面的に発達する個人がここであらわれてくるが、この個人はどのような欲望をもって形成されてきたのかという欲望と発達条件との関係はどうか。すなわち問題は、生産力の発展にともなう歴史展開の基本的契機としての欲望が、衣食住等の基本的な物質的生産、そこから生まれてくる新しい欲望の生産の発展過程から、いかに分業を廃棄しうる全面的発達の欲望そのものを生みだしていくのかということである<sup>42)</sup>。

「諸個人が欲望をもっている現実においては、かれはすでにこのことによって一つの使命および一つの任務をもっている。……プロレタリアは、あらゆる

39) Marx, *a. a. O.*, S. 34, 前掲訳書46頁。

40) *Id.*, S. 77, 同上, 118. ヘラーはこの点を個性の全面発達の欲望と分業への従属の偶然性との矛盾として強調している。Heller, *op. cit.*, p. 90.

41) *Id.*, S. 424, 同上, 224-5頁。

42) この点の解明が山之内氏の次の指摘に答えることにならないだろうか。「問題の核心は歴史的変革におけるプロレタリアートの歴史的役割が、資本主義的経済機構そのものの内部に進行する経済発展の自然史的必然性の帰結としてのみ理解され……変革の主体として……プロレタリアートも、しよせんは人間から疎外された歴史が自己を貫徹するに際してその手を仮りる一個の道具にはかならないであろう。」山之内靖, 前掲論文, 186頁。



他の人間とおなじようにかれの欲望をみたすべき使命をもち、しかもあらゆる他の人間と共通なその欲望すらみたすことができず、……すでにこのことによってもこのプロレタリアはかれの諸関係を革命すべき現実的な任務をもつのである。」<sup>43)</sup>

みたされない欲望が変革の使命を個人に与えるが、その使命を果すことは孤立した諸個人によってではなく相互に依存し合う他者との関係の発展を条件としている。他者の欲望の発展度、充足の程度が自己の発展を制約している。

「一個人としての発展は交通をもっている他の個人の発展によって制約されているのである。」<sup>44)</sup>すなわち階級として発展欲望が指摘されている。この階級もしくは団結に対する欲望の指摘は『経哲草稿』でも触れられてはいるが、『ドイツ・イデオロギー』ではより明確になっている。というのはこの段階での欲望の規定の前進ははっきりとみられるからである。この点は「人間的な欲望」と「非人間的な欲望」についての議論でも次のように述べられている。

「『人間的』という肯定的な表現は、ある生産段階に応じる支配的な一定の諸関係と、これらによって制約される欲望満足の様式とに対応する。……非人間的という否定的な表現は、……支配的な満足様式とを現存の生産様式の内部で否定しようとする試みに対応する。」<sup>45)</sup>

ここでは『経哲草稿』のように資本主義的欲望についての一面的規定は消えており、欲望は物質的条件、生産の発展と消費の水準において規定されている。その意味では価値関係への包摂の前提条件である。

そして価値関係への包摂が進めば進む程、欲望の充足の様式の発展が階級対立の鋭さを増していくことが指摘される。

人間は生産力のゆるすかぎりで自己を解放するのであり、制限された生産力では、「ある人々は他の人々を犠牲としてかれらの欲望をみたし、このことによってある人々——少数者——が発展の独占をえたのに、他の人々——多数者

43) Marx, *a. a. O.*, S. 270, 前掲訳書188頁。

44) *Id.*, S. 423, 同上, 223頁。

45) *Id.*, SS. 417-8, 同上, 219頁。

——はもっとも必要な欲望をみたすためのたえまない闘争によってしばらく（すなわちあたらしい革命的な生産力をうみだすまで）すべての発展から除外<sup>46)</sup>される。

歴史における個人は生産力の発展に制限された欲望の充足に応じて人間として解放されているという限りは、生産力の一定の段階では当然、一部の支配者が発展を独占し、残りの多数者はそれから排除されている。そこで諸個人は自己の発達の欲望を満たすためにも、生産力の発展の制約である生産の諸関係を変革し、革命的生産力の条件としての全面的に発達した個人とならねばならない。すなわち『経哲草稿』の疎外された欲望は人間本質を取戻す契機として、その意味においてラジカルな欲望に転化するのだが、ここでの疎外された欲望は歴史発展、生産力の革命的発展の一条件、つまり分業と私有財産揚棄の条件でもある全面的に発達した人間に対する欲望へと発展していくものとして措定されている。ここで我々は『経哲草稿』よりはっきりと前進した欲望——とりわけ発達欲望——の規定を受取ることができるだろう。

とはいえ、労働者の欲望の変革欲望への転化はいまだそう「なるべき」ものとして措定されている傾向が強くとのように諸々の欲望のなかから資本との対立矛盾の中で具体的に発達欲望、変革欲望へと発展していくのかの論理は不十分である<sup>47)</sup>。それは一つに欲望と価値との関係が未だ十分にマルクス独自の方法で展開されていないからではあるが、それにはまず労働者の状態を規定すべき賃金との関係において考察されねばならない。

#### IV 価値関係における欲望

——『哲学の貧困』、『賃労働と資本』から——

初期マルクスにおける欲望論は『哲学の貧困』を経て『賃労働と資本』に至る研究の過程でその構成部分は一応出そろうことになる。すなわち労働力価値

46) *Id.*, S. 417, 同上, 218頁。

47) ヘラーはこの論理をマルクスの「ought (べき)」論として理解している。Heller, *op. cit.*, p. 90.

論の形成とそれにもとづく剰余価値論において欲望を位置付けることによって、それ以降のマルクス欲望論の基本的構成部分と視点は形成されたと考えられる。

# 1 『哲学の貧困』

さて『哲学の貧困』において欲望論がどのように展開されているかを簡単にみてみよう。

まず第一に、『ドイツ・イデオロギー』での生産と欲望の関係はここでは一層明確に生産に規定される欲望として議論されている。『ドイツ・イデオロギー』の史的唯物論の見地はここにおいても貫かれており、交換価値と分業と欲望の関係は次のように述べられている。「交換価値を説明するためには、交換が必要である。交換を説明するためには、分業を必要とするいろいろの欲望が必要である。これらの欲望を説明するためには、これらの欲望を『前提』する必要がある。」<sup>48)</sup>ところでこの欲望は無前提ではなく生産者も消費者も、生産諸力の特定の段階において、その生産量と消費者の必要を満たす事物としての欲望に対する所見も生産の諸組織に制約されている。消費者の「所見は、彼の資力と彼の欲望にもとづいて左右される。彼の資力と彼の欲望は彼の社会的地位によって決定され、この社会的地位そのものがまた、社会的組織全体に依存する。」<sup>49)</sup>そうである限り、欲望の体系全体は「ほとんどすべての場合、欲望は生産から直接生まれるか、あるいは生産によって基礎づけられた〔全般的な〕事態から生まれるか、そのいずれかである。」<sup>50)</sup>だから消費者にとって必要な欲望の対象は生産に用する労働が最小のものであり、逆に欲望の対象の有効性が必要物であるかどうかを決定するのではない。だから奢侈品とはその効用が大きかりうが労働者がそれを獲得できない時にそう規定されるものである。

「生産物の使用は消費者たちがおかれている社会的条件によって決定されるのであり、これらの条件そのものは、諸階級の敵対関係を基礎としているので

48) K. Marx, "Das Elend der Philosophie", MEW, Band 4, 1959, S. 68, 大内兵衛・細川嘉六監訳「マルクス＝エンゲルス全集第4巻」, 1960年, 63頁。

49) *Id.*, S. 75, 同上, 72頁, 1部改訳。

50) *Id.*, S. 76, 同上, 72頁。

ある。」<sup>51)</sup>

労働時間による必需品・奢侈品に対する欲望の規定がここではみられる。しかしこの規定と労働力価値規定と欲望の関連の議論(我々の第三論点)との関係については今のところ明瞭ではない。というのは、マルクスはすでに「労働」を他の商品と同様に一つの商品とみなし、それが交換価値をもつものとしているが<sup>52)</sup>、その交換価値がどのように決定されるかについての明確な労働力価値規定をここでは展開していないからである。ただ労働者の必需品に対する欲望でさえも、生産(労働時間の最小)の規定によって縮小させられる点是指摘されており、その萌芽は見られる。「貧困を基礎とする社会においては、もっとも貧弱な生産物が、最大多数の者の使用に供されるという宿命的な特権を有している」<sup>53)</sup>。

最後に全面发展に対する欲望は分業との関係ではどう扱われているであろうか。『ドイツ・イデオロギー』において分業の廃棄の一条件として全面发展した個人を指定したマルクスは、その分業が機械の発明、採用によって更に進歩していくことを認める。マルクスの弁証法は一方で「分業は人を墮落させる職務を労働者に強制する、人を墮落させる職務には墮落した魂が照応する、この魂の墮落には累進的な賃金低下が相応する」<sup>54)</sup>ことを指摘しながら他方では自動機械工場の革命的側面をも理解していた。「自動機械工場における分業を特色づけるものは、そこでは労働が特殊的な性格をすべて失ってしまっている、ということである。しかし、すべての特殊的な発展が停止するとき、いちはやく、普遍性の欲求が、個人の全般的発展をめざす傾向が、感じとられはじめる。自動機械工場は特殊専門人と職業白痴を一掃するのである。」<sup>55)</sup>

『ドイツ・イデオロギー』では、全面发展した人間は生産力、生産関係の発展から要請される条件として語られており、その意味では歴史の発展が自然史

51) *Id.*, S. 92, 同上, 90頁。

52) *Id.*, S. 88, 同上, 86頁。

53) *Id.*, S. 93, 同上, 91頁。

54) *Id.*, S. 148, 同上, 153頁。

55) *Id.*, S. 157, 同上, 163頁。

的過程として牛みださなければならぬものであるが、ここでは、労働の側から人格の普遍性に対する欲望や努力として語られているということが、因果必然性としての「べき論」から主体者の変革の欲望へと移行している<sup>56)</sup>。

## 2 『賃労働と資本』、『賃金』

この文献での欲望論の展開は、文字通り資本との関係、蓄積過程における賃金の分析を通じてなされている。資本主義的生産関係、すべてが価値関係として表現される世界では欲望もまた例外ではない。資本と労働の交換を媒介として労働者の欲望がその質的・量的規定を受取るメカニズムが明らかにされる。スミスやリカードのそれではなくマルクス自身の経済学が賃金と欲望との関連を解明しなければならない。

まず第一に欲望の社会的規定が価値関係においてなされている。マルクスは、労働者の欲望は利潤に対する賃金の相対的水準によって規定されているのであるから、たとえ賃金が上昇しても、欲望の水準が上昇したとはいえないとする。なぜなら労働者の欲望の水準というものは、それ自体、すなわち対象の量との関係においてではなく、社会の生産力の発展段階を反映して、相対的に、資本家に比較して、社会全体の水準と較べてどうかということを問題にすべきであるという<sup>57)</sup>。直接に物質的对象に対する規定から、分配関係によって規定された欲望、すなわち社会的に規定された欲望概念の量的側面が語られている。この相対的な欲望水準は利潤と比較した相対賃金の運動に照応しており、「資本が急速に増大することは、利潤が急速に増大することと同じことであり」<sup>58)</sup>、それに対応して相対賃金は急速に減少するのだから、実質賃金がたとえ上昇し、物質的改善がとげられたとしても、そのことは労働者の社会的満足度、地位を犠牲にしていることになる。それゆえ、社会を基準とする労働者の欲望水準は

56) ヘラーはこの点において「ドイツ・イデオロギー」よりも進歩している点を主張する。Heiler, *op. cit.*, pp. 90-2. この論点は「経済学批判要綱」, 「資本論」へと連続していくが、マルクスが全面発達をした人間に対してどういうイメージをもっていたかがうかがえて興味深い。

57) K. Marx, "Lohnarbeit und Kapital", *MEW*, Band 6, 1959, S. 412, 賃労働と資本, 前掲「全集第6巻」, 1961年, 407頁。

58) *Id.*, S. 415, 同上, 411頁。

低下せざるをえない。

更に事柄は相対的な問題だけではない。分業の進展による雇用機会の減少、労働の単純化の進行の結果である再生産費の低下は、過剰人口の創出、労働者間の競争の激化によっても、賃金を最低限度におしとどめる。賃金低下の傾向の強まりは欲望そのものを縮小させ、その質と量を最低限度のものとするのである。「最低限そのものが一つの歴史的な運動をし、ますます絶対的最低水準に下がっていく。蒸留酒の例で言えば、材料も最初はブドウ酒のかす、次に穀物、それから火酒。」<sup>59)</sup>

マルクスは、労働者の欲望の内容と水準が賃金の運動に依存しており、その賃金もまた蓄積の運動によって相対的にも絶対的にもたえず下落する傾向があることを明らかにすることによって、人間的な欲望を疎外された生産者としての労働者の欲望が、近代的賃金労働者の欲望として、資本主義的生産関係の下で、すなわち価値関係として再形成される次第を、新たな質的、量的規定を受取る事を示したのである。労働者の生活が資本との関係に包摂されていけばいくほど、労働者の欲望はその質においては悪化し、量的に還元させられることによって賃金水準へと一面化していく。社会的な欲望もまた、その量において表現される。

しかしながら以上の労働者の欲望の価値関係への包摂、量的還元化の一面的進行は、同時に新しい質の欲望を生みだす。すなわち団結と変革の欲望がそれである。このような関係の発展は「プロレタリアートの解放と新しい社会の建設のための物質的手段」をつくる条件であり、それがなければ「プロレタリアート自身も、古い社会と自分自身の変革を、現実になしうような団結と発展を達成しなかったであろう。」<sup>60)</sup>「賃金のいまわしきの核心」<sup>61)</sup>は家父長制的関係を、雇い主と労働者との関係とし、古い社会の後光がはぎとられ、貨幣関係に解消され、高級労働、芸術労働等が商品化し、古い尊厳さを失い、あらゆる

59) K. Marx, "Arbeitslohn", MEW, Band 6, 1959, SS. 543-4, 賃金, 前掲「全集第6巻」, 1961年, 528頁。

60) *Id.*, S. 555, 同上, 539-40頁。

61) *Id.*, S. 555, 同上, 540頁。

諸関係が商業価値で決定されることを教えている。すなわちこれは、封建的身分関係をはじめ、労働者の生活と意識をしばっていたあらゆる諸関係から労働者を「解放」し、少なくとも労働者の欲望発展の制度的な諸制約をうち破る可能性を与えることを意味するであろう。

## V お わ り に

我々はこれでようやくマルクス欲望論の研究の出発点に立っていることを知る。これまで初期マルクスの欲望論を概観することによって、従来の労働力価値と欲望の量的関係の議論だけでは見えなかった、というよりはその背後にかくれていた諸側面をみることができたのではないだろうか。もともと貧困化論のテーマは、貧困のなかに旧社会をくつがえす革命的側面を発見することもあったはずである。その意味で欲望論の基本的テーマを、資本主義は一方で欲望の全面開花の条件をつくりだし、欲望充足の潜在的エネルギーを累積させていくのに、他方でたえずその欲望の実現を断念させ、両者の矛盾を拡大させていくというようにも表現できるだろう。そこでそのようなテーマを、資本に規定化されつつも、資本との関係の発展の過程として、賃労働の側から、その主体の形成発展の契機を、欲望を媒介として描きだしていくことが重要な課題となるであろう。

『経哲草稿』はそうした基本的テーマの解明の糸口となるものであった。疎外された労働の規定から出てくる欲望の疎外は、そこにおいて議論されている欲望の諸側面は、何よりも人間的欲望が満たされないで、逆に疎外される結果生じるものであった。それに対してはゆたかな感性をもつ人間的欲望が対置され、それを取戻す契機としてラジカルな欲望が生起する。

「ラディカルな革命はラディカルな欲求の革命でしかありえない」<sup>62)</sup>。

そこで欲望の革命を果たすためには欲望そのものを歴史発展の中に基礎として位置付けることが重要である。『ドイツ・イデオロギー』は人間の普遍的発

62) K. Marx, "Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie Einleitung", MEW, Band 1, 1955, S.387, ヘーゲル法哲学批判, 前掲「全集第1巻」, 1959年, 423頁。

展のための欲望を工業と交通が創出することを明らかにした。分業にもとづくこの体制は欲望を満たす条件をつくるはずであった。人間的欲望の到達点とその諸条件は明らかにされた。しかしその形成のメカニズム、欲望発展の理論的構造は価値論の視点が十分ではなかった。

『哲学の貧困』、『賃労働と資本』等において、欲望は価値との関係において論じられる。欲望は賃金、利潤の動態的運動の過程において豊富な諸規定を受け、労働力価値を構成するものとして再び価値関係に入りこむのである。そのことによって生産力の発展を担う資本の運動に対する賃労働の主體的契機としての欲望の発展の運動法則がはじめて把握しうるのである。

そしてまた、欲望の変革は欲望の構造の変革であり、新しい欲望の体系への転回であるから、現存の欲望を構造的に、その概念の豊富化、展開のうちに理解することが大切である。欲望の概念は、自然的欲望、生理的欲望から出発し、欲望による欲望の生産、社会的欲望の創出へと展開する。それと同時に欲望の量的還元化、貨幣への一面化、欲望の充足の賃金と利潤の運動への従属が価値関係への包摂として進行する。資本主義における欲望の体系は深く価値関係にとらわれている。この意味で欲望の変革は、価値関係そのものの変革へと向かわざるをえないのであり、欲望の経済学は価値関係における欲望の問題の解明を中心としてきたのであった。だから労働者の欲望をめぐる諸関係は労働力の価値と賃金の問題を焦点として現象するが、問題はさらにその争点の領域を広げていくのである。それは資本の蓄積運動とともに進行するが、その諸側面の検討はこれからの課題となる。

これまでの検討は、初期におけるマルクス欲望論を、(1)疎外論、(2)史的唯物論、(3)価値論（賃金論）といったマルクスの理論的構成部分の形成と関連させてまとめたものである。マルクスが欲望論のこれらの視点を、以後どのように発展させていくかは『経済学批判要綱』から『資本論』へと至る彼の研究を検討することによって明らかになるだろう。